

東京芸術劇場舞台技術セミナーVOL.3

「スピーカの安全な仕込みとワイヤレスマイクの使われ方」

開催報告

日時・平成 25 年 5 月 21 日 午前 10 時より 17 時半まで

場所・東京芸術劇場プレイハウス

主催・東京芸術劇場・アーツカウンシル東京

共催・公共劇場技術者連絡会

協力・一般社団法人日本舞台音響家協会

参加対象・音響技術者、文化施設職員、大学・専門学生等音響に興味のある方

参加費・1000 円

参加者・約 100 名 USTREAM 配信での視聴・全国で 88 名

第 1 部「スピーカの安全な仕込み・危険な仕込み」

講師・市来邦比古氏（音響アドバイザー）、本村実氏（神奈川芸術劇場 舞台技術課 音響主任）

進行・石丸耕一（東京芸術劇場 管理課施設担当主任・音響）

①「スタッキングの安全な作業」



(スタッキングの実演と舞台上に集まる参加者)

第1部ははじめに、劇場備品の大型ラインアレイスピーカを利用して、スタッキングの実演を行ない、続いて受講者による体験を行なった。

安全作業に必要な足場の設営から始まり、作業の進め方の注意点やポイントを本村氏が実演を交えて丁寧に、具体的に解説をしていただいた。金具の操作方法の確認の時は、スピーカメーカーにも加わってもらい、メーカー純正の金具の強度や耐用年数などについて、質問に対応していただいた。



(参加者に指導をする本村氏、市来氏、劇場音響チーム)

体験希望の参加者には、劇場側が用意したヘルメット、軍手、靴カバーを装着してもらった。

②スピーカのフライング

続いて、劇場備品の移動型スピーカと純正吊り金具、吊り部材を使用して、スピーカのフライング作業についても同様に、本村氏に解説と実演をしていただき、続いて参加者による体験を行なった。

フライングの実演の際には、舞台機構の施工会社の技術者にも参加してもらい、バトンの耐荷重などについても解説をしていただいた。



(1部、2部を通して、舞台上の実演の手元は移動カメラを通じてスクリーン投影を行なっている。)



(吊り部材とスリングの扱い方の注意点を説明する本村氏)

第2部「ワイヤレスマイクの使われ方」

講師・渡邊邦男氏（新国立劇場 音響課長、日本舞台音響家協会理事長）

進行・石丸耕一



（ワイヤレスマイクの使われ方の概略を解説する石丸）

第2部「ワイヤレスマイクの使われ方」では、進行の石丸より、ワイヤレスマイクについての解説の後、講師の渡邊氏より、ワイヤレスマイクの特長について、数々の実験を交えて紹介していただいた。



（ミュージカルのデュエットを想定した複数のピンマイクの至近距離での位相干渉実験を行なう渡邊氏と石丸）

続いて、当劇場の末廣より、ピンタイプのワイヤレスマイクの装着方法を実演しながら紹介。受講者から希望者を募り、装着して行くプロセスと、装着に必要な部材の解説を行なった。



(顔の皮膚に直接装着するための部材の一部)



(末廣のマイク装着デモに興味津々の参加者)

ピンワイヤレスマイクを装着して下さった受講者の方に、そのままご協力をいただいて、

「7分程度の短い台本（「銀河鉄道の夜」をテキレジしたもの）を朗読しながら、舞台上を前から奥へと歩いてもらい、最後は引き柵の上に乗ってもらって、朗読しながら引き柵が上手へ移動する」

という即興劇を数回繰り返した。

その中で、渡邊氏からは、

「俳優が舞台の前から奥へと移動する際に、ワイヤレスマイクのSRを前から奥へと音像移動させる実演」

を紹介していただいた。

当劇場の石丸からは、

「ファンタム電源供給が可能なプラグオン送信機を用いて、集音用バウンダリーマイク（PCC）をワイヤレスマイク化して、移動する舞台装置に対応させる実演」

を紹介した。



（テキストを読みながら参加者が引き柵に乗り、そのまま舞台転換を行なう劇場舞台チーム）

第3部「ワイヤレスマイク 新周波数帯域への移行の傾向と対策」

講師・松木哲志氏（日本舞台音響家協会名誉理事）、渡邊邦男氏、市来邦比古氏
進行・石丸耕一

第3部では、パネルディスカッション形式をとり、松木氏、渡邊氏、市来氏、石丸の4人で進行した。なお、この第3部は USTREAM 配信を行なった。

はじめに松木氏より、現在進行中のワイヤレスマイク新周波数帯域への移行に関する携帯電話会社と総務省と利用者団体による話し合いの経過について、紹介と解説をしていただいた。



（松木氏による新周波数帯域への移行の最新の動向の報告）

その後、4人によるパネルディスカッションでは、移行のタイミングと問題点について、「ここでなければ言えない・聞けない」話が次々に飛び出した。会場からも沢山の質問が飛び、この問題が現在の舞台音響において、いかに深刻で関心の高い問題であるかが改めて再認識させられることとなった。

ワイヤレスマイクの新周波数帯域への移行の過程で解決して行かなければならない問題として、

- ・ 対応製品の充実と成熟
- ・ 負担を強いられる出費
- ・ 地域ごとに割り振られるチャンネルに対応する方法

などに関わる赤裸々な質問、際どい発言がパネラーからも参加者からも留まることなく発せられ、時間切れとなって終了はしたが、会場は熱気と充実感に包まれていた。これは、場合によってはワイヤレスマイクの所持及び配備そのものの大きな構造の変革もありうる可能性を、音響に携わる誰もが感じている現状の現れであると言える。

